

「曲水」(3-2)、句帖に9句、他1句。6月例会席題句に3句。

水巴編「曲水俳句鈔」、東京堂を売捌所とし曲水吟社より發行。

8月1日付、旅先の青木幸太郎宛ハガキ。

4日・吟社8月例会、於流觴居。出席20余名、席題のうち、

「蟻」に3句。

10日・帰省。(短文「車中にて」がある。)

12日・満22歳。

21日、25日・東京青木幸太郎宛ハガキ。

「曲水」(3-3)、句帖に6句、水巴選鷄林句集に5句。長

頸子選募集句「蝙蝠」に選者吟1句。祖春と共同編集の趣味欄

「夏趣七題」は、子規、一葉、泣菫、荷風ら文人7人の短文抜

書き。7月例会の記事及び席題句2句、又「俳諧走馬燈」欄に

短言を載せる。

この年7月創刊の「赤い鳥」2号に、「青鳩」「鴉・鴉」が

載る。(写真・右前者は「推奨童謡」、後者は「募集創作童謡入

選作」としてである。作者名は海野厚一で、巻末に作者住所と

して、赤坂区新坂町82北村方と当時の止宿先を紹介している。

9月17日・東京青木幸太郎宛ハガキに、「さて明日はどうあ

つても上京いたすべく云々」とある。

吟社9月例会、席題「夜寒、相撲」、2句。

「曲水」(3-4)、句帖に3句、流觴居小集に2句、吟社8

月例会席題句に3句。頑石の俳句を批評した一文「老成の美」

及び帰省の車中でのスケッチ「車中より」がある。

10月・「曲水」(3-5)、句帖の4句は、夏の帰省中の作句、

静岡長頸子とある。「季題寸言」に桜、他を載せる。

左衛門歓迎句会、席題「柳散る」2句。

「赤い鳥」(1-4)、創作童謡欄に、「廻り燈籠」が載り、

巻末の「通信」欄で選者北原白秋が「才筆」と評している。

11月・吟社11月例会、席題「秋の雲、柿」に各1句。

「曲水」(3-6)。句帖3句、左衛門歓迎句会記事及び9月

例会席題句2句。又、質疑註釈欄に水巴近詠2句の註解を書く。

12月・吟社師走例会、席題「鴨、花ハッ手」1句。(高点句)

「曲水」(3-7)。遅刊で12月中旬発行、7日付編集後記に

「私の突然の臥床で思ひがけぬ遅刊を来し深くお詫び致します」

と記し、更に「明日から新年号にとりかゝります。同号は六十頁、

うんと新年らしい気分のものを作上たいと水巴先生はじめ非常

な意気込です。虚子先生初め諸先生から既にい、原稿が戴いて

あります。同号は必ず年内に発行いたします」とも書いてある

が、その正月号消息欄を見ると、「本号は長頸子君によつて編輯

致さる、予定に候ひし処、連日の徹夜に虚弱なる同君はついに

健康を害され、ために甚しき遅延を来たし」と12月13日付で

記されている。

「赤い鳥」(1-6)に「天の川」が推奨童謡として載る。(写

真次頁)作者名は前回同様海野厚一。選者白秋は同号通信欄に「伝

習を離れた新鮮さがあり、調子もよく童謡としてはすぐれたも

の」と記す。

この年から大正8年にかけて流行したスペイン風邪に、上京

中の父伊三郎が罹患。宿泊先の神田の宿屋で10数日看護の事が、

のちの随筆「一椀の茶」に見える。

藤田圭雄の「日本童謡史」(昭和46年あかね書房刊)186頁に次